

## 枇杷野川の「夜泣き石」

烏帽子岳の麓を枇杷野川が流れています。春にはイワナやヤマメが遊び、イワツツジが咲きます。夏は、青葉が涼しげに揺れ、秋は紅葉が美しく、季節を彩る流れは、見る人の心を和ませてくれます。

その川の三番橋辺りに、人が背中を丸めてうずくまっている形の大きな石があります。いつとはなしに、人々が、この石を「夜泣き石」と呼ぶようになりました。

昔々、お侍が世の中を治めていた頃、この辺りには、漁師さんやお百姓さんが住んでいました。

夏の日の夕暮、13歳ぐらいの娘を連れのお侍の親子が野辺地にやって来ました。長旅をしているらしく、着物も汚れ、お侍の髭ものびていました。

親子は、もう一歩も歩くことができないほど疲れ果てていました。

二人が枇杷野川の冷たい水をゴクゴクと飲んでいると親切なお百姓さんが通りかかりました。

疲れている二人を見て、

「あんだも、めらしっこも疲れてらべ、ここさ、泊まっていげ」

と言って、山小屋を貸してくれました。

それから、

「のごりものだども食べろ」

とおにぎりを差し出して帰って行きました。

父と娘は、お百姓さんの優しい気持ちと、おいしいおにぎりのおかげで心もお腹も一杯になりました。

そして、親子は、ぐっすりと眠ることができました。

次の朝、お百姓さんがやって来て驚きました。

親子は、身なりは貧しいのですが、身綺麗にした二人には、気高い気品がただよっていました。

なかでも、お侍様は、立派なお殿様にお仕えした身分の高い方のような様子でした。詳しいことを話すこともなく、お侍様の名前も生まれもわかりませんでした。

娘の名前は千鶴と言ひ「父様、父様」と親思いで、優しく美しい、かわいい娘でした。

お百姓さんや村の人達の勧めもあって、親子は枇杷野川の近くに小さな家を建てて住むことにしました。

弓の得意な父様は山で、ウサギやキジ・山鳥を捕る狩人になりました。

時には、川で魚を釣ったり、山菜やきのこを採ったりして暮らしていました。

千鶴も父様とふきやわらびなどの山菜を採ったり、村人の子守りや田畑の手伝い、針仕事をして暮らしを助けていました。

親子の暮らしぶりは豊かではありませんが、村人達がうらやむくらい仲良く楽しく暮らしていました。

父と娘は、夜空の輝く星を見ては、旅の途中で病気でなくなった母様のことを思い出していました。

都で、親子3人が仲良く楽しく暮らしていた日々。なかでも、母様との思い出は、父様にも千鶴にとっても幸せいっぱいでした。

「母様は、いつでも千鶴の心の中に一緒にいるよ。」

と父様は話し聞かせていました。

千鶴は母様から教わった料理や針仕事が大好きでした。

そして、母様のような優しい人になりたいと思いました。

冬は、針仕事やわらぞうりを千鶴が作り父様は、弓矢や釣り針などの道具を作って暮らしていました。

時々、村の人達が、お酒や漬物・乾物を持って遊びに来ては、父様と狩りや釣りの仕事のことや遠い美しい都の話をしては、仲の良い友達になりました。

つらい旅を続けていた親子にとっては、野辺地での慎ましい暮らしは、毎日が楽しく、幸せでした。

ある日のこと、父様は、いつものように狩りに出掛けて行きました。

千鶴は、父様が無事に帰って来ますようにと願いをこめて見送りました。

夕ごはんの支度も終えて、千鶴は父様の帰りを今か今かと待っていました。

しかし、今日は、すっかり日が暮れて満月が空高く上り辺りを照らしましたが、父様の姿は見えませんでした。

父様を探し呼ぶ千鶴の声を聞き、村人達も父様を探しに来てくれましたが、見つかりませんでした。

次の日も、またその次の日も、

「父様、父様」

「お侍様、お侍様」

と叫びながら千鶴と村の人達は険しい山道を父様を探しました。

千鶴も山を登ったり、谷底に下りたりと、慣れない山道を歩きまわりました。足からは血がにじみ出てきましたが探し続けました。

村の人からは、

「こったに探していないのだば、熊にやられだな」

「神かくしだ」

などとあきらめの声が出始めました。

「日も暮れて暗くなったし、探すの無理だ。山ばおりるべ」

と探すことをやめることになり村にもどりました。

千鶴は家にもどりましたが、あきらめきれずに山に向かって

「父様 父様」

と毎日、毎晩 呼び続けていました。

村の人達は、可愛そうな千鶴にご飯を運んで、励ましてあげました。父様を待ち続ける

千鶴は、一人ではご飯も喉を通らず、すっかり痩せてしまいました。

それでも、父様を呼び続け、いつのまにか泣き声になり、声もかれて、ついに力つきてしまいました。

千鶴は、川岸にうずくまった姿で亡くなっていました。

村の人達は、川岸に可愛そうな千鶴のお墓を作りました。

ある夜、村人は、枇杷野川のせせらぎが、

「父様恋し、父様恋し」

と呼ぶ泣き声に聞こえました。

それは、父様を呼ぶ懐かしい千鶴の声でした。

川底が見える綺麗な川の流りに月の光が写ると、そこに美しく悲しげな千鶴の顔が揺れて見えたような気がしました。

今も夜になると、三番橋の辺りで、

「父様、父様恋し」

と、千鶴の悲しい泣き声をせせらぎの中に聞くことができます。

千鶴の父を思う心と姿が「夜泣き石」となって、このお話を語り伝えているです。

どっとはらい